

「小金銅仏の裳の縦状文様について - 野中寺菩薩半跏思惟像との関連 - 」

村田靖子

小金銅仏に施されている文様は、細かい為に見過ごされているものもあるように思われる。その一例に、誕生仏の幾例かに見られる裳の縦状文様がある。それは裳の正面の腰帯の下から裾の縁取りの部分まで、丁度、両脚部の上面に当たる位置にタガネ目を連続的に横に細かく入れて、連珠文風に仕上げている。

この文様は韓半島の三国時代からわが国の白鳳時代の誕生仏に及んでいる。

今のところ、中国の着衣誕生仏の単独像の遺例が殆ど残されていないので、源流を中国に見ることは難しい。本来、誕生仏はガンダーラやインドの例に見られるような裸形誕生仏に真の姿が見られ、それに次第に裳をつけるようになったのであり、裳をつけるということは釈迦の太子時代の王城での姿を写したと言われる菩薩像に由来するであろう。従って、誕生仏の裳の縦状文様は菩薩像の裳の装飾（瓔珞など）から考え出されたのではないかと思われる。菩薩像の中には腰帯の位置から正面左右に瓔珞を垂下させている例が何点かある。そのような装飾が誕生仏に取り入れられる際に、より控え目な裳の文様として表わされたのではないか。将来菩薩となる誕生釈迦の像には既に菩薩像のように首飾りや腕釧などをつけた例もある。また、菩薩像から誕生仏の裳に取り入れられたものとしては縁取り文様もあり、誕生仏の腰紐や襜の稜の文様も菩薩の瓔珞からの発想ではないだろうか。即ち、誕生仏の裳とその装飾は以下の段階を経たと考えられる。

裸形像 短裳像（縁取り） 中裳像（縁取り、縦状文様、腰紐・襜の文様） 長裳像
裳の縦状文様は今のところ誕生仏の何点かにもみ表われているが、野中寺の弥勒菩薩半跏像が菩薩像としては唯一、同様に両脚部に文様を施している。誕生仏のものに比べれば、菩薩像らしくずっと幅広で、文様も連珠円文の半切形という華やかさであるが、脚部の縦状文様で、縁取りの部分まで至っているという点で同じである。

菩薩半跏思惟像は太子の思惟の姿を取ったものという考え方に従えば、将来菩薩（太子）となる誕生仏と菩薩半跏思惟像が同様な文様を裳に施しても不合理ではない。先述の通り、首飾りや腕釧などをつけた誕生仏があり、菩薩半跏思惟像にも同様の装飾が見られるのである。

野中寺像を初唐の影響をいち早く受けた（岩佐光晴「野中寺弥勒菩薩半跏像について」『東京国立博物館紀要』27号 1992年）斬新な像と考えれば、あるいは今は失われた初唐の菩薩あるいは半跏思惟像の中に先例があったかも知れない。

その傍証としては隋時代の石造菩薩立像の中に野中寺像と同様な半切形の連珠円文の意匠を持つ帯飾りを腰から下げているものがあることが挙げられる。